

造形表現における子どもの創造性に対する批判的考察

— 4歳児の絵遊びの活動を通して —

森 下 嘉 昭 浅 井 拓 久 也

1. 研究目的と背景

本研究では、4歳児の絵遊び活動を事例として、保育者の造形教育における子どもの創造性に対する捉え方について批判的な検討を行う。

保育においては、子どもの創造性を伸ばすことが重視される。保育所保育指針(2017)では、保育の目標での創造性について、「様々な体験を通して、豊かな感性や表現力を育み、創造性の芽生えを培うこと。」と示されている。本目標を具体的にした5領域の「表現」では「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」とされている。保育者は、絵を描く、製作をするという造形的な表現活動のなかでも、こうした目標を実現できるような保育を行うことが求められる。

保育を行う際、多くの保育者が子どもの創造性を伸ばすために、あるいはつづさないようにするために、子どもの自由にさせるという考えを前提にする。造形表現の研修の場では、保育者から子どもの表現活動に関して、「なるべく子どもの自由にさせるようにしている」、「子どもなりのイメージを広げよう」と声掛けを行うが、保育者が介入し過ぎると、それは子どもの思いの表現ではなくなってしまうのではないかというように、子どもの創造性の伸長と保育者の援助の間に苦悩する言葉を聞く。保育所や保育士によって造形表現における子どもの創造性の伸ばし方は異なるものの、共通するのは子どもの自由に描かせる、製作をさせるというものである。

一方で、子どもの自由に任せるというやり方とは異なる見解もある。子どもの創造性を大切に考えながらも、単に遊ばせるだけではなく、どのような子どもに育ててほしいかという願い、ねらいと現状の子どもの姿を照らし合わせたときに、具体的な活動と援助の方法に対する処方箋をもてない保育者は少なくない。雑であっても、他者の模倣しか出来なくても、表現活動にしっかりと向か

えなくても、それがその子の創造性であるという把握でとどまるならば悩む必要はないのかもしれないが、やはり育ててほしい力や発揮してほしい子どもの姿がある。乳幼児期には、子どもたちが周囲の世界に挑む意欲や、同時に自己を抑制する力なども芽生え始め、人間形成の基礎が育まれる。そのような時期に、子ども一人ひとりの創造性を発揮しながらも、子どもに身に付けてほしい力を育みたい。このように考えると、造形表現活動において子どもの創造性を伸ばす望ましい造形表現活動とはどのようなものかを探っていくことは、重要な課題の一つであろう。

造形表現活動において、子どもの創造性を伸ばすためには、基本的なことを教えるにとどめて子どもの自由に任せるのがよいか、あるいは保育者が考えるあるべき姿を目指した指導的な介入をすべきかという論点について、先行研究では十分に明らかにされてこなかった。そこで、本研究では、造形表現において子どもの創造性を伸ばすためには、子どもの自由に任せるか、あるいは保育者の指導的な介入を行うべきかについて検討する。

造形表現の活動には絵画、製作、造形遊びなど多様な活動が含まれている。そのすべてを検証することは現実的ではないため、本研究では絵遊びの活動を事例として用いる。絵遊びについては後述するが、絵遊びを事例として採用したのは、絵遊びは子どもの絵を描く活動に対して一定の枠組みを課すものだからである。仮説的なことを述べるのなら、もし子どもの創造性は自由に任せることによって伸長するのであるのなら、絵遊びをする子どもの作品は没个性的で、非創造的なものになるであろう。絵遊びは子どもの活動に明確な枠を課すものだからこそ、本研究で設定した問いを明らかにするうえで有益な事例となるであろう。

2. 絵遊びとは

(1) 絵遊びとは

「手遊び」「歌遊び」という言葉は一般的によく

使われており、この言葉の入った書籍もよく目にする。また、具体的な遊びのイメージも湧きやすい。このような遊びは、子どもたちが心地よいリズムに乗って歌を歌いながら、手や指を使って楽しく遊ぶのが目的であるが、その遊びを通じて様々な力が身についていくこともある。

例えば、子どもの手指は最初から滑らかに、自分の思い通りに動かせるわけではない。これは生活の中で自然と出来るようになることもあるが、幼い頃から楽しい手遊びを経験することで、手指を思い通りに動かそうと意欲的に取り組み、ますます指が細やかに動くようになっていく。動くようになるから、ますます楽しくなる。遊ぶことで獲得した技能を用いて繰り返し遊びこむことで、同じ遊びに飽きてしまって、新しいバリエーションを自分たちで考えたり広げていくことも出来るようになる。

こうして身についた力は、日常生活にも生かされ、また新たな遊びに挑む意欲につながっていく。「絵遊び」も同様で、絵の「要素（点・線・面・色）」を利用して遊ぶことそのものが目的である。描く活動は本来すべて遊びであるが、「休みの日にこんなことをして遊んだよ」「遠足でこんな面白いことがあってね」といった絵とここで定義する「絵遊び」は、質的に異なる。

生活の絵や経験したことの絵などは、「先生（友達）あのね」「こんなことがあったよ」「あんなことしたよ」「こんなこと見たよ」「こんなこと思いついた」と、具体的かつ複合的・総合的に様々な要素を使って表現している。これらは子どもが絵で自己伝達しながらも他伝達しようとする「子どものお話」と言ってよい活動である。しかし「絵遊び」は、ごく簡単なルールの下で、絵の要素を使って「ただ点を打って遊ぶ」「思い描いた線を引いて遊ぶ」「好きな形を描いて遊んだり、その形に色をつけて遊ぶ」といったように「ただ描くことを楽しむ」遊びである。ハートマークや蝶々のような模様をただひたすら描いて楽しむことに近い。描く行為そのものを楽しむことで、その延長線上に様々な力が育まれる。

（２）絵遊びの効果

絵遊びの活動で育まれる力は幅広いが、主に４つの効果に着目する。

第１に、「心を解放する」ということである。

自分なりの表現をするためには、表現活動に対して心が自由であることが基本である。不安や心配事、苦手意識を抱えていたのでは自由な表現は出来ない。心を自由にあらしめるには、心を解放する必要がある。ごく簡単な共通ルールの下で、遊びに取り組むことで、描く行為に没頭・集中する経験をし、心を解放していく。また、簡単なルールによりどの子どもも取り組むことができ、「自分にもできた」ということが大きな自信となり、そのことも心を解放する一つの要因となる。絵遊びは、子どもの心を解放し、自由な表現を誘発する第一歩にもなり得る。

第２に、「ルールを認識して遊ぶ」ということである。簡単なルールを設定することで、ルールがある中で遊ぶ感覚を身に付ける。これは、一見子どもの自由を制限しているように感じられるが、意識しなければならぬ簡単なルール（抑制）を設定することで、子どもにとっては安心して自由にできる範囲をはっきりさせることができる。ルールの範囲においては制限がないのである。状況が自由に設定されている（放任されている）ことと、子どもが心を自由に解放して表現できることは同義ではない。簡単なルールによって、子どもなりに自由闊達に表現できることもある。また、それを発展させて自分たちでルールを考え出すこともできる。

第３に、「材料・用具に慣れる」ということである。初めて使う材料や用具であっても、適切な援助により子どもたちは自分なりに工夫しながら表現活動に取り組むであろう。しかし、簡単な絵遊びを通して材料・用具の特質を経験的に知っていれば、より自分の思い通りに自由に扱い、満足する遊びが展開できるようになる。初めて扱うモノでは、なかなか自分の思い通りにはいかないからである。造形活動においても、材料・用具を経験すればするほど自分の思い描いたように、自信を持って自分なりの表現をすることができるようになっていく。

第４に、表現に向かう「集中的な態度を身に付ける」ということである。造形表現においては、自分なりにイメージを膨らませるにしても、それを色や形や素材を使って表すにしても、集中して丁寧に取り組むことは大切な要素である。子どもは楽しいことなら自然と集中する。簡単な絵遊びの活動を楽しむことで、自然と集中していく感覚

を身に付けることも期待できる。また、遊びそのものが簡単なので、保育者はその遊びの内容をいかに膨らませるかという部分については子どもに任せやすく、主に意欲や態度に関して声掛けをしていくこともできる。こうして身に付ける意欲や態度は、結果的な作品が「写実的にキリンさんの特徴を捉えている」「人物の特徴(構造)を理解して描いている」などといった技術的なことよりもよほど重要であるし、将来にわたって子どもの様々な表現に影響を与えるものである。

3. 研究方法

(1) 調査対象と期間

調査対象として、県内のM保育園の保育者7名、4歳児クラス26名(男児11名、女児15名)を対象とした。

調査は2017年12月11日に実施した。

(2) 調査方法

本研究では、子どもが描いた作品の分析および保育者へのインタビュー調査を実施する。

作品分析では、調査対象となる4歳児に絵遊びの活動を経験してもらい、活動のプロセスや子どもが描いた作品に表れた特徴を分析した。具体的には、絵の具と筆を用いて「動物さんのお散歩」という絵遊びを行う。この絵遊びでは、画用紙などの支持体に動物の足跡に見立てた点々を打ち込み、お散歩しているつもりで遊ぶ。絵の具と筆を用いるので、1本の筆を丁寧に扱えば大きな点、中くらいの点、小さな点とサイズをコントロールすることができる。イメージする動物のサイズによって、そういった筆のコントロールの工夫も期待できる。

活動の手順は、まず導入でこれまでの生活での散歩の記憶を想起するような話をしたり、絵本の『ぞうくんのさんぽ』を読み聞かせたりなどしながら、動物とお散歩のイメージをしっかりと膨らませ、期待感を高めていく。次に、みんなで動物になって、画用紙(四つ切)の上でお散歩をして遊ぶことを提案する。その際、絵の具と筆で点を打ってお散歩すること、筆の扱いによって点の大きさ(足跡の大きさ)が変化するという遊び方を実際に少しやって見せながら知らせる。さらに、これまでの絵の具の活動でも伝え続けていたカップのふちで絵の具を調整することや、使用した筆

は元の色のカップに戻すことなど、絵の具と筆の基本的な扱いについても確認をする。途中で紙が足りなくなった場合は継ぎ足しても良いことを伝え、活動の様子を観察する。

準備物としては、子どもたちが普段使用している筆、画板、画用紙(四つ切)である。絵の具は赤・青・緑・茶などの痕跡が強めに残る色を水で溶き共同絵の具として準備する。環境構成としては、落ち着いた状態でものびやかに活動できるように、フロアを広くし、画板を風車型に配置する(写真1)。



写真1. 画板を風車型に配置した環境構成

また、絵遊び前後での子どもの変化に最も気が付くのは日頃から接している保育者である。そこで、絵遊びに参加した7名の保育士を対象に、子どもの創造性に対する見解について絵遊びの前後で半構造化面接を行った。

具体的には、性別、保育士としての経験年数のような基本的な事項に加えて、子どもの頃のしつけは厳格か自由か、子どもの創造性とは何か、子どもの創造性を感じる瞬間とはどのようなときか、子どもの創造性を伸ばす方法はどのようなものか、造形活動で子どもの創造性をのばすためには具体的にどのようにしたらよいかを質問した。

4. 分析および考察

(1) 作品分析

まずは活動の様子から振り返る。導入では、お散歩の話やその際に犬や猫が歩いていた様子などを丁寧にやり取りしながら、期待感やイメージを膨らませていくようにし、その後遊びを提案した。この時、最初に筆をしっかり押さえつけて大きな

点を打って見せ「どんな動物さんがお散歩しに来たかな」と投げかけると「ゾウ」「キリン」、次に筆の穂先で小さな点をちょこちょここと打つと「ネズミ」「リス」など、知っている動物をイメージした発言が多くあった。遊び方の提案時には、仮に大きな足跡は「ゾウさん」、中くらいの足跡は「クマさん」、小さな足跡は「ネズミさん」とした。この段階で、ただの小さな点の羅列を見た子どもから「可愛い」という発言も聞かれた。何かを作り出し表現するためには、実感を伴う表現のイメージを持つことが大切な要素の一つである。これらの発言から、多くの子どもが既にただの点に動物のイメージをしっかりと重ね合わせてお散歩と捉えていることとともに、その動物に対する自分なりの感情まで膨らんできていることが分かる。

活動中の取り組みを意欲・態度から振り返ると、導入である程度しっかりと自分なりのイメージが膨らんでいたことと、遊び方が難しくないことから、全体的に開始時から意欲的に集中して活動に取り組んでいた。これは、使用した画用紙の枚数にも表されており、1人を除いてほぼ全員が四つ切2枚以上、最も多い子は6枚にも及んで活動を楽しんだ。1人1枚で活動を終えた子どもも、紙面いっぱい足跡で埋まってしまうほどお散歩遊びを楽しんでいた（写真2）。

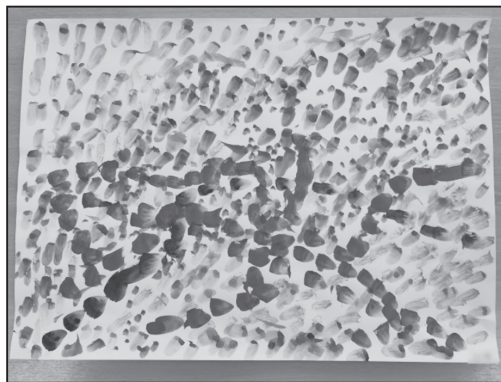


写真2. 画用紙いっぱいにお散歩を楽しんだ作品

また、各自がイメージを持ち、自分なりに遊びを発展させていったことが、活動中の多くの発言や作品から窺えた。例えば、「ある動物とある動物が会って一緒にお散歩に行った」「これは人間の足跡で、一緒にお散歩している」など、活動の中で自分なりに創造した物語を話す子どももい

た。筆がすべり、きれいな点々の足跡にならなかった時には「動物が滑った」、赤が混ざると「動物が怪我して血が出た」、茶色が混ざると「泥にはまった」といったつぶやきも聞かれた。他にも「どしーん、どしーん」、「大きい足跡がお父さんとお母さん」、「小さい足跡が赤ちゃんよ」、「豹もいるよ」などプロセスの中で自分なりのイメージを生成しながら遊んでいる発言が多数あったり、点（足跡）と点（足跡）が重なりそうになると、「ぶつからないように、他の道に行こう」など、丁寧に表現意図をもって活動している様子もあった。「ヒツジさんの足跡が見てみたい」と、遊びから発生したイメージから、実物が見てみたいという探求心を感じさせる子どももいた。自分の画用紙が足跡でいっぱいになると新しい画用紙を自ら求める子どもも多く、描く遊びに対する積極的な意欲・態度が感じられた。いっぱいになった画用紙は乾燥棚に置いていったが、間に合わないものについては一時的にフロアに並べておいた。その様子を見たある子どもから、「足跡つなげる？」と、自分だけでなく周囲の友達とのつながりを意識する新たな遊びを思いついたような発言も聞かれた。ある程度ルールの定まった遊びにおいても、子どもたちはただルールをこなしているだけではなく、自分なりに様々なイメージを膨らませながら、主体的に遊びの内容を創造し、更新していることが分かる。

材料・用具の視点からも、子どもたちはルールのある遊びの中でも自分なりに様々な工夫をし、発見していることが見受けられた。

共同絵の具の基本的な扱いについては、筆をカップに戻す際、間違えて違う色のカップに戻す子どもも若干名いたが、概ね最初の確認をしっかり押さえていた。ある一定のルールで筆や絵の具を扱うことは、落ち着いて活動に臨むための要素でもある。

そのような中で、当初は写真3のように筆をコントロールして大小様々なサイズの点を打ち、動物をイメージしながら画用紙の上を自由にお散歩して遊ぶことを想定していた。もちろん、これも用具の工夫のひとつである。しかし、途中からは点々による足跡だけでなく、少し大きめの形を描き、面として表現する子が出てきた。怪獣の足跡とのことである。写真4の絵は、この子どもの3枚目にあたる。

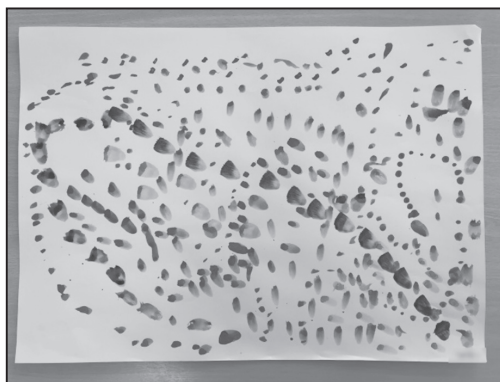


写真3. 動物の足跡をイメージした大小の点

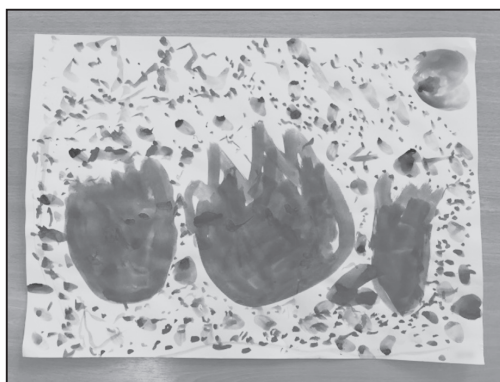


写真4. 怪獣の足跡

また、曲線による表現も現れ始めた。子どもに尋ねてみると、それはヘビがお散歩した跡だという(写真5)。



写真5. ヘビの散歩が加わった作品

写真4・5いずれも、自分の表現したいイメージに応じて点の足跡から発展させ、自らの方法を

作り出している。

写真6の画像は、写真5の子どもの絵遊び以前の絵である。

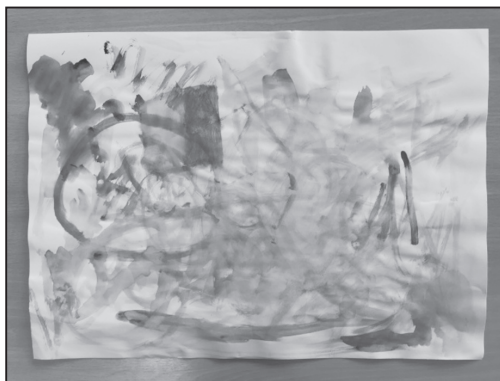


写真6. 絵遊び以前の子ども作品(1)

この絵を見る限り、絵の具を使い、探索的に何かを探っていることは伝わってくるが、最終的にはめたくり遊びに至っている。もちろん、自由な探索的遊びを否定するものではない。しかし今回は、簡単なルールのある絵遊びの活動によって、子どもが、無作為な探索ではなく自分の表現したいイメージに合わせて、具体的な工夫をし、自分の思いを表現するのに適した方法を模索しようとしていることが分かる。さらに、このヘビに対して、「これは細いヘビさんがお散歩しているのかな?」と尋ねると、「大きいヘビもいるよ」と描いて見せてくれた(写真7)。

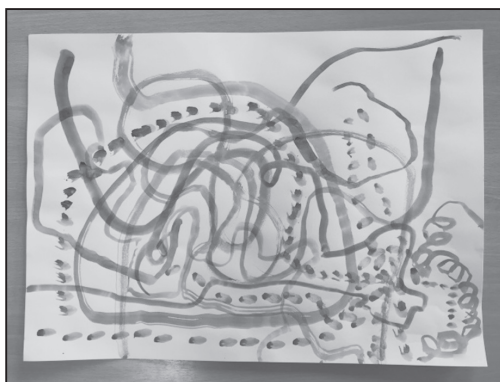


写真7. 大小のヘビの散歩を描き分けた作品

この写真7は、点々よりも曲線による表現が主となっているが、1本の筆をコントロールしなが

ら、太い線や細い線を描き分け、大きいへび、小さいへびを表現していることが分かる。イメージしやすく技術的に無理のない範囲で、しかし自分の意図に合わせて考え、工夫し、伝えてくれていることが分かる。

子どもたちの中には、写真8のような気づきを楽しむ子もいた。



写真8. 絵の具と筆の扱いに見る子どもの工夫（1）

これは、点々の足跡を打ちお散歩を楽しんでいる最中に、筆に含まれている絵の具と水分が少なくなり、筆の穂が割れてきたことによる形の変化に気づいたこの子なりの発見である。この子にとっては絵の具と水分をたっぷり含んだ筆とは異なる形状が面白く感じられ、この画像を含む4枚にわたって意図的に毛先を割り不思議な足跡を作り出すことを楽しんでいる。



写真9. 絵の具の筆の扱いに見る子どもの工夫（2）

これまで述べてきているように、絵遊びはルール、すなわち子どもにある程度の制限を課す

遊びであるが、その結果としての子どもの作品を見ても、そこにはその子なりの工夫や発想といった創造性が発揮されている。

絵遊びの活動において獲得したこれらの工夫や気づきは、子どもの表現にどのように影響してくるかという点について、クラスの先生にその前後の活動の絵を見せていただいた。その一部が以下の写真である。

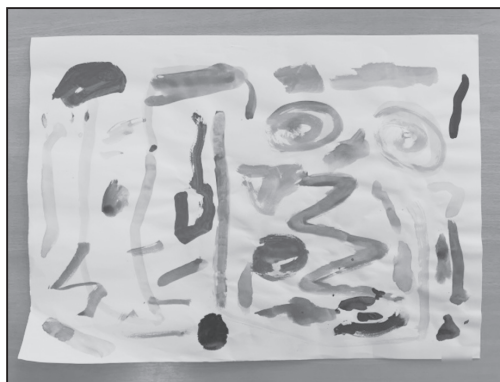


写真10. 絵遊び以前の子ども作品（2）

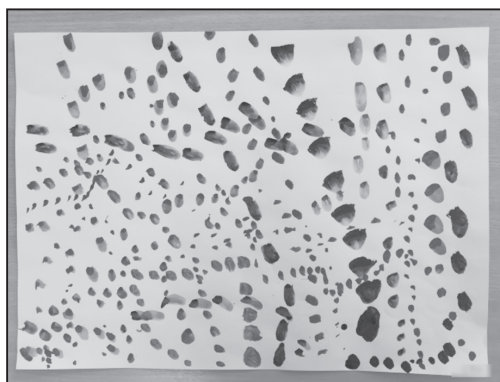


写真11. 筆圧をコントロールした絵遊びの作品

写真10は、「お散歩」の絵遊びを経験する以前の絵である。様々な線や形を探っている様子が見て取れるが、イメージに合わせて筆圧を意図的にコントロールした様子はあまり見られない。写真11の絵遊びを経て写真12の雪の絵につながるが、ここでは自分の思いに応じて、意図的に筆圧をコントロールし点や面（形）を描き分けているのが分かる。絵遊びの経験で得た筆のコントロールの経験が、その後の表現に生かされていることが示唆される。これは、「いろいろな大きさの点を描

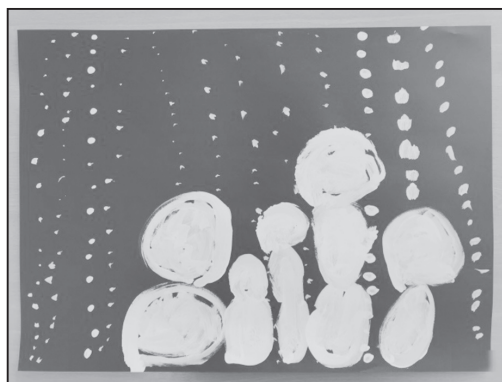


写真12. 雪の絵

いてみましょう」と、子どものイメージから独立して、ただ単にテクニックのトレーニングしたわけではなく、自分のイメージに合わせて筆をコントロールし、お散歩遊びを楽しんだ結果、身に付けたものである。ゆえに、他の活動においても、自分のイメージに沿って筆をコントロールすることにつながったのではないだろうか。自分のイメージを形にするために意図的にコントロールするということは、表現に対しての丁寧な取り組みや態度にもつながる。

(2) インタビュー調査の結果

子どもの絵遊びによる作品分析の結果から、子どもの自由に任せて描くのではなく、一定のルールのもとで描くほうが創造的な作品が多いことがわかった。日々子どもたちと向き合っている担任等の保育者を対象としたインタビュー調査からも同様の感想をいただいていることがわかった。

絵遊び以前は、子どもの創造性を伸長するには、子どもの自由に任せておくことが好ましいと考えている保育士がほとんどであった。たとえば、子どもの創造性を伸ばすためには、まずは子どもにどう思うか尋ねる(保育士A)、ルールを決めずに遊びながら描いていく(保育士E)、子どもが遊んでいる様子を見守っている(保育士F)というように、子どもに任せるという見解であった。絵を描く際にルールや見本を見せると、それに影響を受けてしまい、子どもの創造性が失われてしまうと考えていたからである。

しかし、絵遊びを導入して以降、子どもの創造性の伸長に対する見解が変化し始めた。たとえば、決められたルールのなかで自由に活動する(保育

士B)、ルールのなかで発見や気づきがあるようにする(保育士E)というように、子どもの自由に任せるのではなく、一定のルールの中でも子どもの創造性を伸ばすことが可能であることを感じるようになっていた。

こうした変化は、絵遊び以前より多くの子どもが絵を描く遊びに集中して取り組む様子が影響を及ぼしていると思われる。いつもよりやる気もあるし、絵を描くことが苦手な子どもも積極的に取り組んでいた(保育士A)、最後まで集中して取り組んでいる子どもが多かった(保育士B)、絵を描くことが苦手な子どももたくさん描けていた(保育士C)、集中して楽しそうに取り組んでいた(保育士G)というように、絵遊び以前の子どもが自由に描くときと比べて、絵遊びの中でルールがある方が子どもは集中して取り組んでいたと回答している。描くことが苦手でも、一定のルールが足場がけとなっていることがわかる。

このように、絵遊び前後で子どもの創造性とルールの関係に対する見解が変化していることがわかる。日々子どもと接する保育士自身、絵遊びにおける子どもの作品や様子を見て、子どもの創造性とルールのパラドキシカルな関係に気が付いたのである。すなわち、子どもの創造性を伸ばすために子どもの自由に任せて描いた場合、描くことを途中でやめたり、どの子も似たような作品になったりすることがある一方、一般的には子どもの創造性を制限するものと考えられているルールを課す場合、描くことが苦手な子どもさえも集中して取り組み、遊びが展開し、子どもそれぞれに創造的な作品ができあがるということである。

5. まとめ

本研究では、絵遊びの活動を事例として子どもの創造性について批判的に検討してきた。一般的には子どもの創造性を伸ばすためには、子どもの自由に任せる方がよいとされているが、絵遊びのように単純なルールを課すことで、これが足場がけとなり、子どもの創造性が発揮され、伸びる可能性があることが明らかとなった。これは、絵を描くことが好きな子どもはもちろんのこと、苦手意識をもっている子どもも楽しく、集中して取り組んでいることから、自尊感情や自信、学びに向かう力の涵養につながる保育の示唆でもあろう。

もちろん、今回の結果は、自由な探索活動や表

現活動を否定するものではないが、ルールや一定の制限があるからと言って、子どもの創造性が発揮されないかと言えば、そうでもない、ということと言える。大切なことは、その活動において育ててもらいたい明確なねらいと、保育者の子どもや子どもの表現に対するかかわりや眼差しの質である。子どもの様子を丁寧に見取り、認めつつやり取りすることで、子どもなりの視点や創造性を大切に育みながらも、特定の地域や社会の文化的価値観を伝承したり、クラスや園の共通体験として、押しつけではなく様々な経験をすることの可能性も見えてくるのではないか。

今後は、引き続き様々なバリエーションの絵遊びや絵遊び前後の表現活動のデータを集めながら、絵遊びの活動が、子どもたちの表現にどのような影響を及ぼしているか、より広範で精密な分析を重ねていく必要がある。

参考・引用文献

- 1) 林健造・岡田愨吾、「保育の中の造形表現」(第7刷)(2012)
- 2) 林有紀、「視野を広げる造形活動:教育現場における造形指導の工夫についての実践報告」、京都文教短期大学研究紀要52、209-215(2014)
- 3) 厚生労働省、『保育所保育指針』、フレーベル館(2017)
- 4) 香月欣浩、「主体的造形表現が学生たちにもたらすもの」、四條畷学園短期大学紀要48、37-40(2015)
- 5) 香月欣浩、「自発性を先行させた子どもの造形表現と主体的態度に関する一考察」、美術教育学研究 48(1)、137-144(2016)
- 6) 花篤實・岡田愨吾、「新造形表現(理論・実践編)」(第7刷)(2015)
- 7) 岡田愨吾、「絵画表現の材料・用具の世界」(2009)